のとかに見ゆる二龍山はも
昨日までしこくさ生ひし山の端ゆ
けさうつくしく上る朝日子

夜の思

林　壽祐

蒼天高く且つ廣し
夕雲たゞよふ西の空
日は入り果てゝ影くらし。
宵の明星さきがけて
雲間をいづれば滿天の
星は黃金を布けるごと。
月はやがてひんがしの
海の面より冴え上り
榮華の庭も賤が屋も
あまぬく照らす神の業』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

噫しづかなる夜半の色
星も眠るか聲はなし
下界の響もをさまりて
月に鳴き行く雁の聲
仰げば高し天津そら
思へば尊うとし神の業
縱令や此身は低くとも
魂は清けき汝が姿
ミューズの神の御前に
吾を導け月よ星』

フレーベル會俳句端書集

一、課題　春季雜吟一人十句以下
一、締切　一月二十五日限り

一、披露　明治卅八年三月發行本誌

一、賞品　天地人三座には美景を呈す

一、撰者　當分本會の撰とす

一、投稿　本誌講讀者は何人にても投吟する事を得用紙は繪葉書（眞筆刷物隨意）に限る、住所氏名雅號を明記し必らず左の名宛にて送らるべし。

埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會俳句掛

鹽野奇零宛

第六回俳句端書集

万歳や鼓の音の幾間越し　長野　飯塚　曉霞

爭ひも來ては笑ひぬ歌がるた　同

陣中に餅も配りて今朝の春　陸奥　花松　曉星

正月や遊び暮して日の足りぬ　同

海戰の跡も靜かに初日の出　同

元朝や見心廣き海と山　平岩　學洋

何事もせずに忙がし三ケ日　同

羽織着た人も積込む初荷かな　同

初空や尾上の松に鶴の聲　埼玉　帶白園一甫

魁の花なり香なり福壽草　同

軍國の咄しを先や禮者人　同

二三輪書齋の窓に梅の花　岩崎　一樂

旅にして初日迎ひぬ蜑が家　黑田　一葉

渡船場につなぎし船や松飾　同

夜は松の上から明けて初烏　大分　阿部　きく

初東風や出舟の競ふ港口　神田　松本　のり

この儘に置ても見たし門飾り　堺　原田　紫水

着ぶくれて元日さりや小百姓　福岡　遠藤　眞月

拍手の音いさぎよし初日出　大阪　松風庵